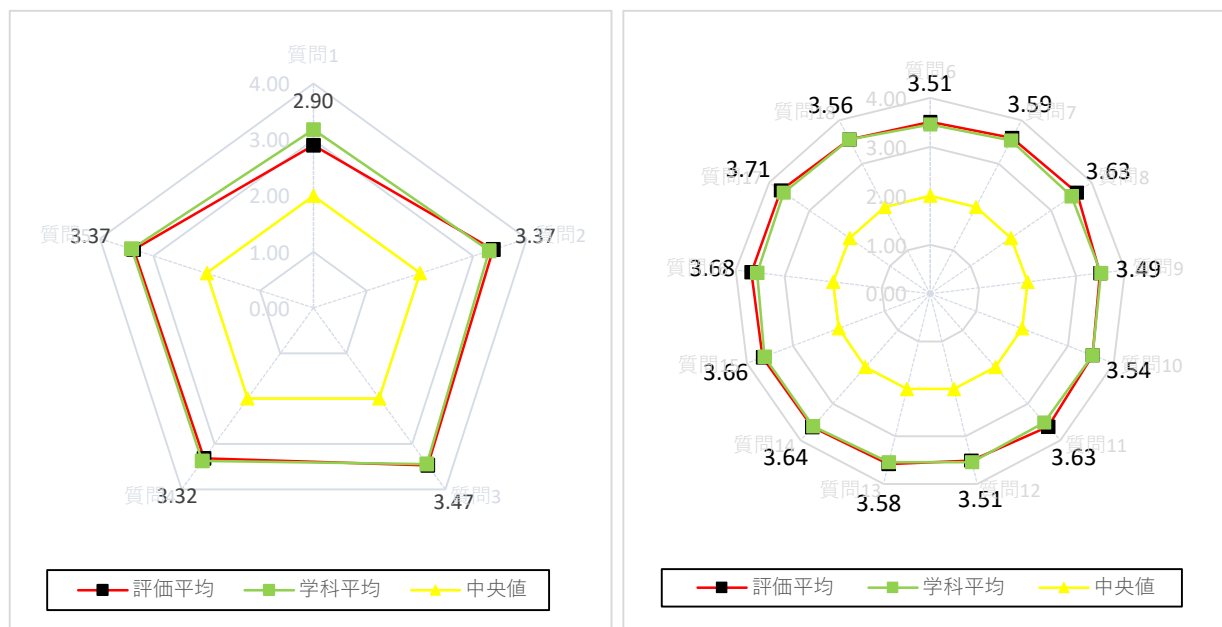


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 リハビリテーション 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		文化人類学	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

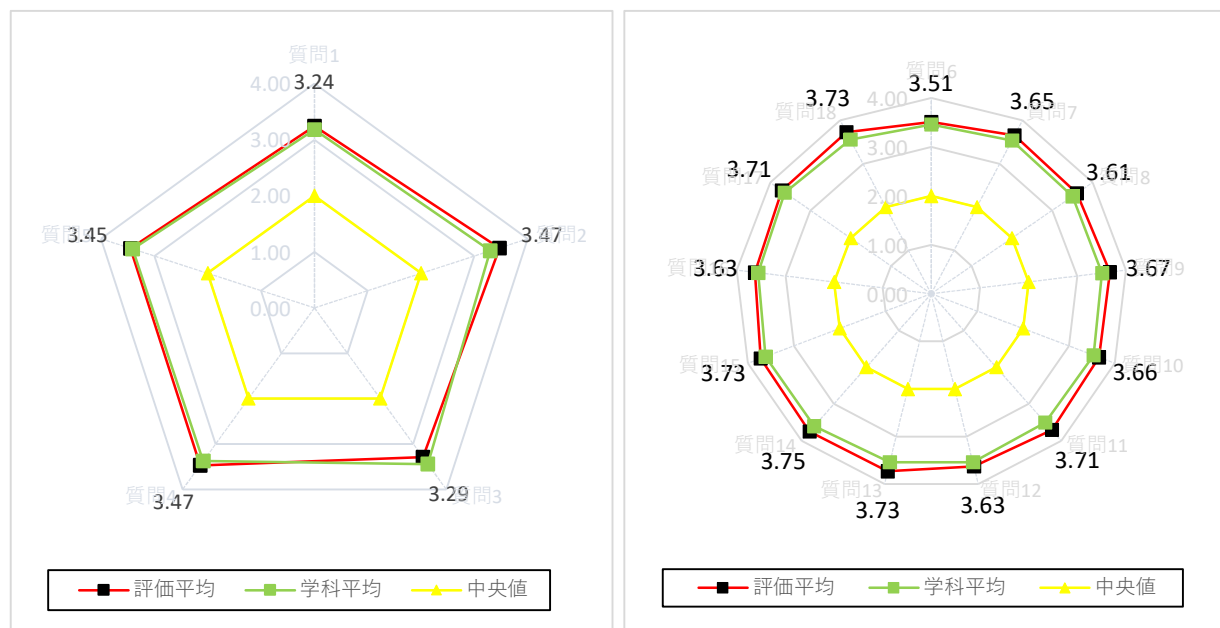
おおむね学生の評価は悪くないと考える。
ただし、実際に授業を実施しているの反応は薄いので、より学生に興味を抱かせる内容を心がけたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

(2)でも記述した通り、より学生に興味を抱かせる内容を心がけて授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		くらしと経済	171名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

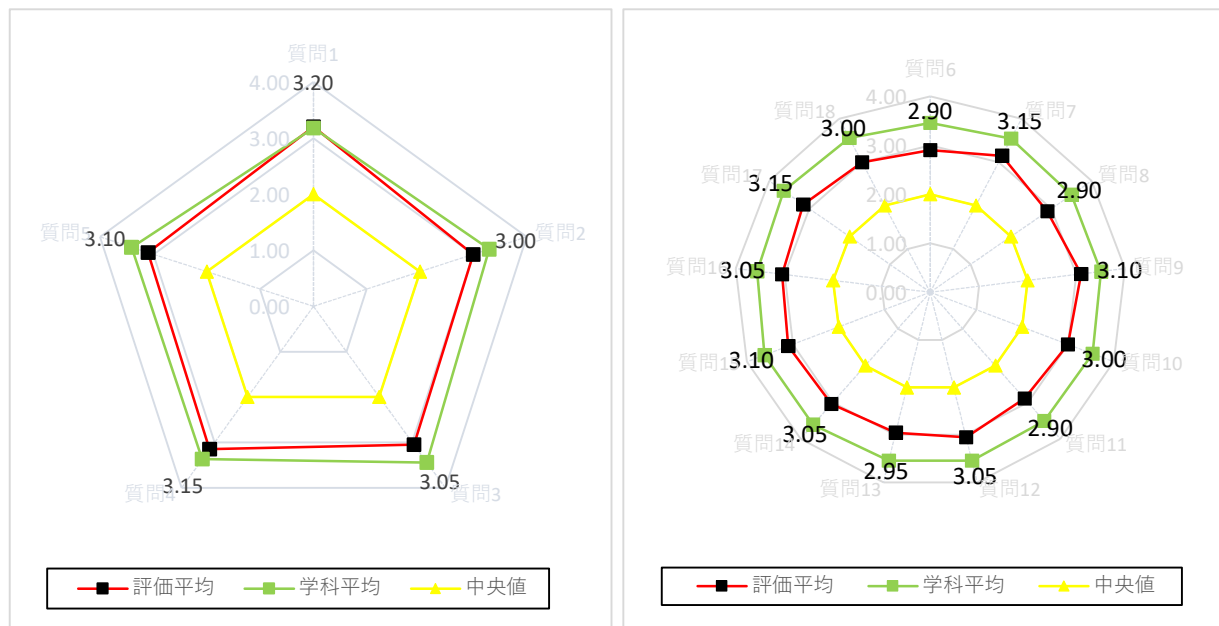
授業評価は、概ね学科平均を上回った。授業評価があることで、授業で不足している部分が明瞭になる。また、授業評価は、授業に対する工夫や改善のモチベーションとなるため、とても参考になっている。今回の授業評価の結果は次年度の授業の改善に役立てたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

分かりやすい授業を心がけたい。そのため、学生が興味を持つような講義資料の作成を行いたい。視覚的な図解や経済の出来事をチャート式にして解説するなどして、学生の理解の向上に役立てていきたい。また、質問の時間なども設けて、疑問点などはできるだけ丁寧に解説していきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		データサイエンス入門	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

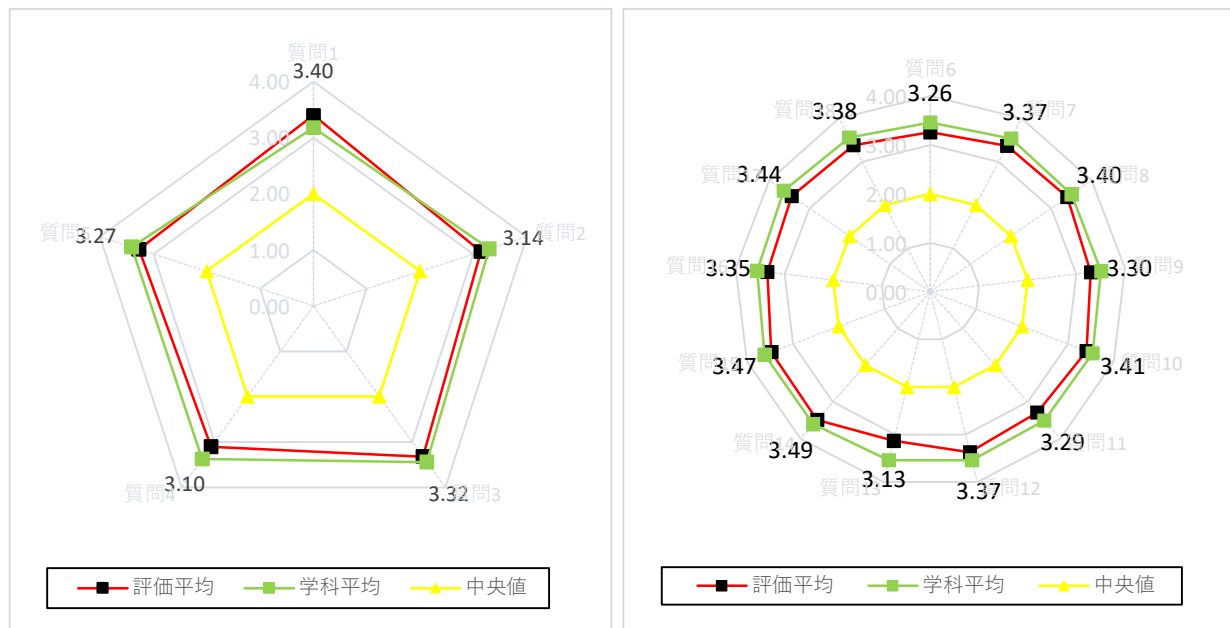
授業進捗管理をほかのクラスと合わせることに慣れておらず、個別の対応や、丁寧な指導が追い付かなかったことにより、学生にとっての不満がたまるものとなったと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は同科目は受け持たないが、同様の形態（他クラスとの進捗管理が必要な授業）の際には、より柔軟な進捗と、準備を入念に行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		データサイエンス入門	113名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

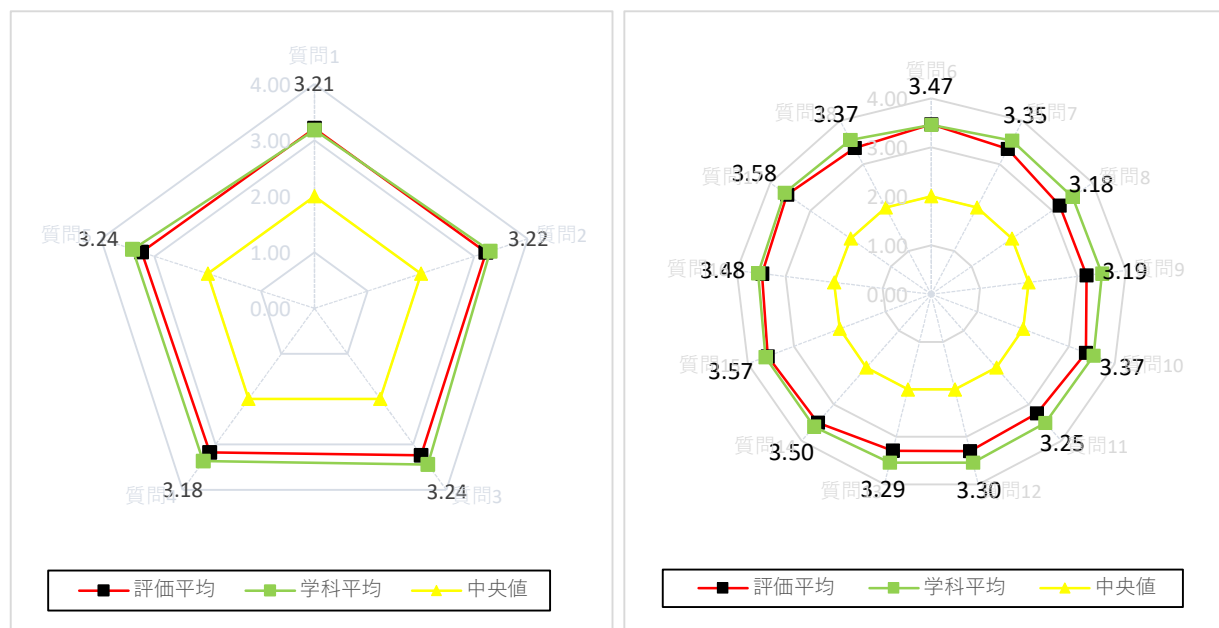
「データサイエンス入門」は、情報リテラシ、統計学、Excelの基礎などを講義した。毎回の作業があり、学生にとっては、やや負荷が高い内容であったと想像している。また、扱う内容に対して、時間が不足し、学生にとっては進度が速いと感じることもあったのではないかと想像している。とくに、欠席や授業中での作業の遅れがあると、途中からついていけなくなることもあるため、難しいと感じる学生が多かったと想像している。

(3) 次年度に向けての取り組み

2026年度は、Excelの内容を「データサイエンス演習」に移動し、データサイエンス入門では、情報リテラシと統計学の基礎を中心に講義する予定である。これにより、内容の負荷を減らし、学生が授業についていきやすくなることを期待している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		データサイエンス入門	113名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

○学科平均との比較：Q7～Q13は過少評価が見られた、授業の分かり易さや工夫などが学生に伝わっていない可能性があった。

○特に低（高）い項目についての考察：Q8の点数が低い理由は、難しい内容にないして工夫が不足していた可能性がある。一方、Q17の評価が高い理由は、適切に且つ熱心に授業を行った結果と考えられる。

○自由記述についての分析と評価：概ね満足であった学生が多いものの、概念が難しい内容については、丁寧な説明を求める要望もあった。時間に余裕があれば、理解力の不足しがちな学生に声掛けなどを行って底上げができればと考えている。

○本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価：ICT使用の習得に加え、データサイエンスのリテラシーの教育目標は概ね達成できたと考えている。

○授業全般に対する反省点：Q18の平均点よりも若干低評価であるものの、3.4の評価点であったので、学生の満足度は概ね達成できたのではないかと考えられる。

○回答率に関して：私が担当する学生にチャットやEメールで呼びかけたために、高割合の回答率を得られたと考えられる。しかし、手間暇がかかり他の業務に支障が出る場合もあった。

(3) 次年度に向けての取り組み

○授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法：平均点に比べて、Q7～Q13は過少評価であったので、授業の分かり易さや工夫などについてもう少し丁寧な説明を心掛けたい。

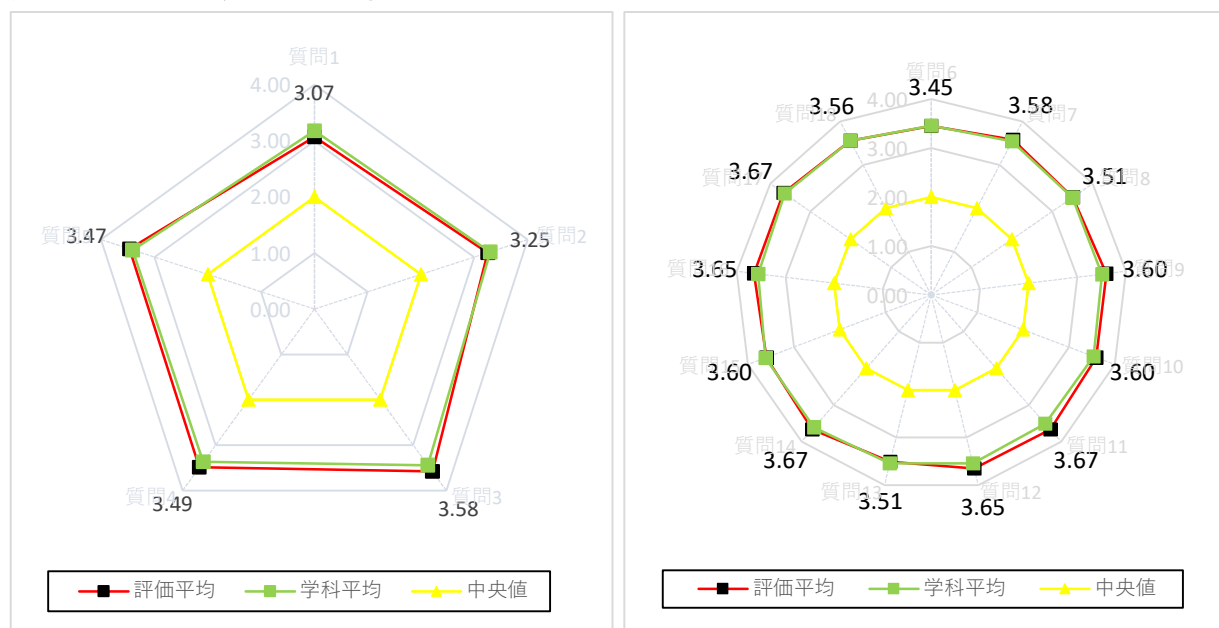
○授業全般の反省点に対する取り組み方法：Q18を確認すると、概ね学生の満足度は高いので、現状を維持しつつ、理解力が不足気味な学生に対して丁寧な説明に取り組んでいく予定である。

○次年度に新たに導入したいと考えている授業方法など：積極的な学生とのコミュニケーションを試みたい。

○授業評価そのものに対する意見：時間が限られている中で、また、学力不足の学生が多く集まる中で、いかに効率的に授業準備とその評価ができるように工夫したいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		データサイエンス演習	113名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

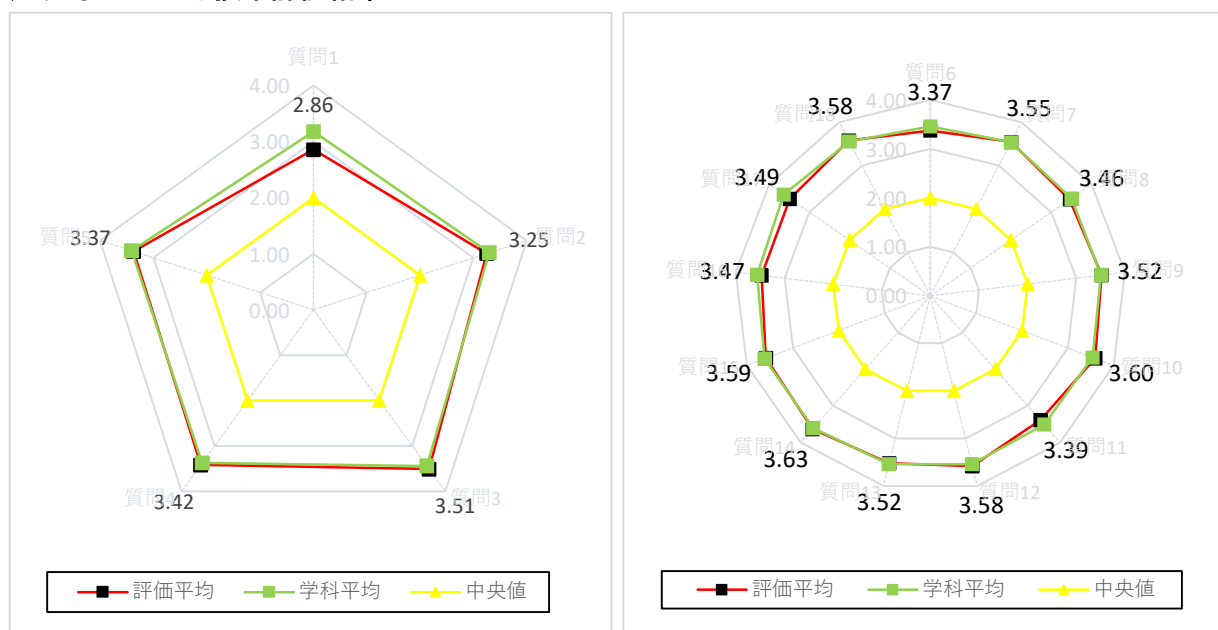
- 学科平均との比較：概ね平均値付近の評価点を得られた。
- 特に低（高）い項目についての考察：評価点が相対的に低かったQ8の理由について、難しい内容に対して工夫が不足していた可能性がある（反省点）。一方、Q11の評価が高い理由は、丁寧に書かれた配布資料等を授業毎に提供したことが要因と考えられる。
- 自由記述についての分析と評価：概ね満足であった学生が多いものの、理解が難しい内容については、もっと丁寧な説明を求めている意見もあった。特に、理解力の不足しがちな学生に対して、声掛けなどを行って底上げを図る必要があると考えている。
- 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価：実践的なICT使用の習得を教育目標にしており、殆どの学生は単位取得できたので、概ね達成できたと考えている。
- 授業全般に対する反省点：Q18の評価点では、平均点とほぼ同様であり、その値が3.6の高評価であったことから、学生の満足度を叶えられたのではないかと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

- 授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法：Q8の評価点は過少評価気味であったので、授業の分かり易さや工夫などについて、もう少し検討したいと考えている。
- 授業全般の反省点に対する取り組み方法：Q18を確認すると、概ね学生の満足度は高いので、現状を維持しつつ、理解力が不足気味な学生に対して丁寧な説明に取り組んでいく予定である。
- 次年度に新たに導入したいと考えている授業方法など：授業に取り残されそうな学生について、授業中や授業前後の空き時間などを利用して、できるだけ積極的なコミュニケーションを試みたい。
- 授業評価そのものに対する意見：時間が限られている中で、また、学力不足の学生が多く集まる共通科目で、授業準備と学生への評価が効率よくできるように工夫したい。学生の中にも、Eメールやチャットを確認しない者もいるので、連絡事項や学生へのフィードバックについては、必ずメッセージを読むように促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 看護学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング 看護 デジタル社会共創学環		データサイエンス演習	114名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

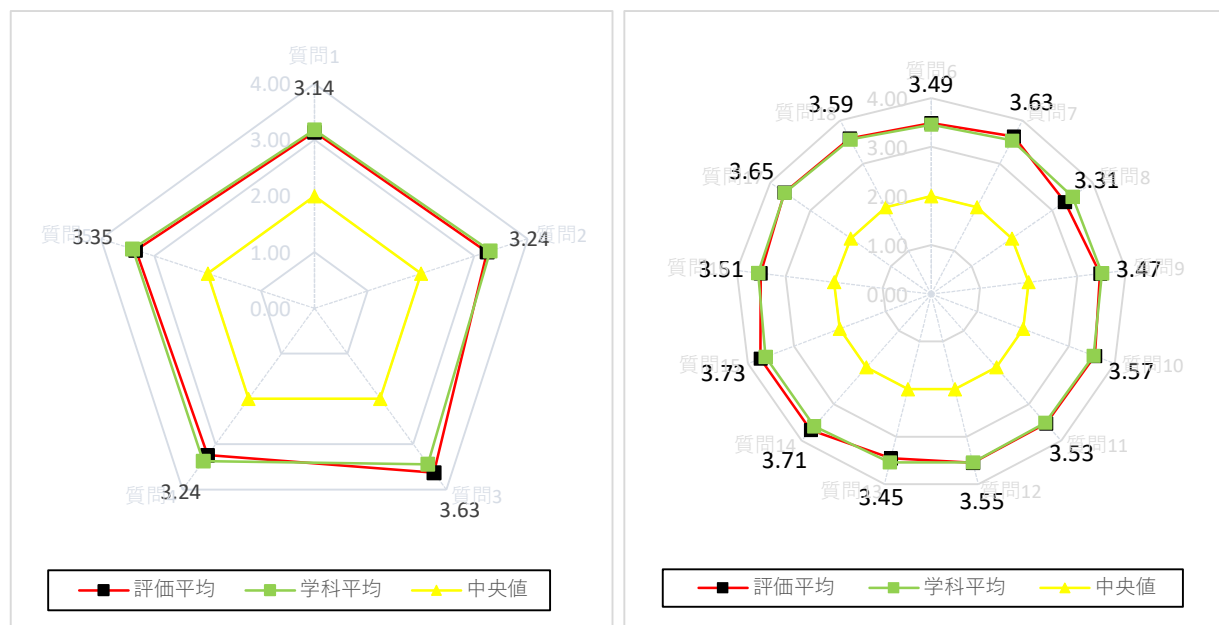
他の共通教育科目との差はそこまで大きく見られなかったが、質問1（授業欠席）は他と比べても低く、欠席が目立った。これは演習内容が容易であることや、課題を提出すれば単位が取れるという認識を学生が持っていた可能性も考えられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は欠席に関する注意を行い、一人ひとりの学生に寄り添った対応をこころがけ、授業準備を入念に行って臨む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 子ども学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 子ども 心理カウンセリング デジタル社会共創学環		情報処理演習	51名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

○学科平均との比較：幾つかの項目は低評価であったものの、その他は平均点前後か、多少の高評価が得られたことが分かる。

○特に低（高）い項目についての考察：Q8の点数が低い理由は、難しい内容に対して工夫が不足していた可能性がある。一方、Q14&Q15の評価が高い理由は、レベルが異なる学生に対しても、適切に且つ公平に授業を行った結果と考えられる。

○自由記述についての分析と評価：概ね満足であった学生が多いものの、複数の丁寧な説明を求める要望もあった。時間に余裕があれば、理解力の不足しがちな学生に少し自身のリソースを割く必要があると認識した。

○本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価：アドバンスなICT使用の習得に加え、データを用いた報告書の書き方について、多くの学生が達成できたので、当初の目標は、概ね達成できたと考えている。

○授業全般に対する反省点：Q18の平均点レベルにあるので、学生の満足度は概ね高いと考えられる。

○回答率に関して：授業中の回答に加え、欠席した学生にチャットやEメールで呼びかけたお陰で、75%以上の回答率を得られたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

○授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法：平均点に比べて、Q8の点数は過少評価であったので、授業の分かり易さや工夫などについて、もう少し丁寧な説明を心掛けたい。

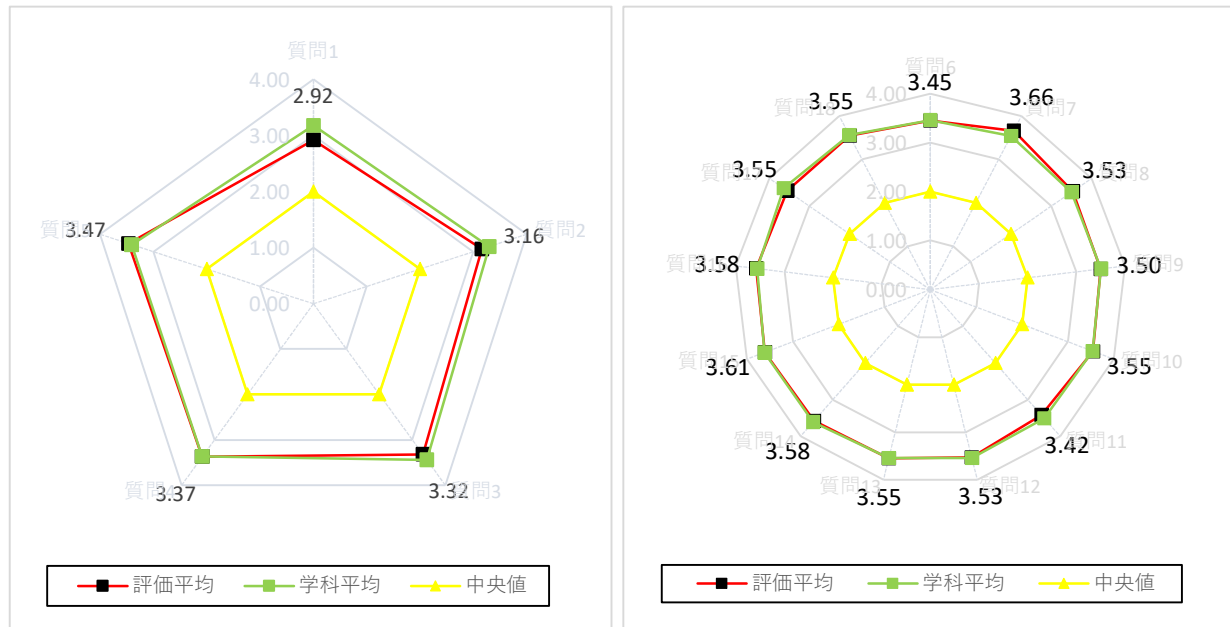
○授業全般の反省点に対する取り組み方法：Q18を確認すると、概ね学生の満足度は高いので、現状を維持しつつ、理解力が不足気味な学生に対して丁寧な説明に取り組んでいく予定である。

○次年度に新たに導入したいと考えている授業方法など：特に授業に取り残されそうな学生について、できるだけ積極的なコミュニケーションを試みたい。

○授業評価そのものに対する意見：時間が限られている中で、また、学力不足の学生が多く集まる中で、いかに効率的に授業準備とその評価ができるように工夫したいと思う。学生の中にも、Eメールやチャットを確認しない者もいるので、必ずメッセージを読むように促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部 子ども学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉 リハビリテーション 子ども 心理カウンセリング デジタル社会共創学環		情報処理演習	50名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

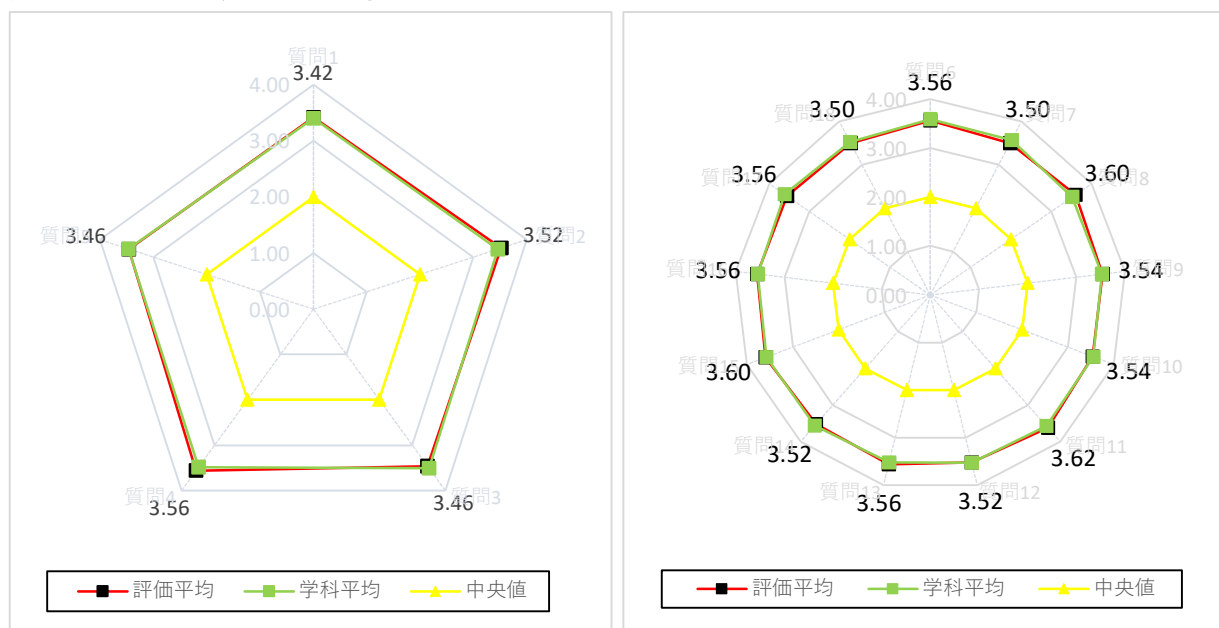
「情報処理演習」は、Officeツール、なかでもExcelのやや高度な使い方を演習を通じて、習熟させることを目的とした科目である。ほぼ、毎日が学生自身の作業であるため、学生にとっては、やや負荷が高い内容であったと想像している。また、扱う内容に対して、時間が不足し、学生にとっては進度が速いと感じることもあったのではないかと想像している。とくに、欠席や授業中での作業の遅れがあると、途中からついていけなくなることがあるため、難しいと感じる学生が多かったと想像している。

(3) 次年度に向けての取り組み

2026年度も、2025年度と同様の内容で実施する予定である。講義資料の操作説明を充実させるなど、学生が授業についていきやすくなるように工夫する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		食品衛生学	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まず、質問1から5について分析すると、どの項目もほぼ学科平均と同程度であった。より詳細にみると、質問2と4が、わずかに高かった。一部の学生は、やる気をもって、本講義に取り組んでいるようであった。しかし、質問2は学科平均より若干低く、授業中に寝てしまったりしている学生もいるようである。本講義は座席してをせずに行っているのも、やる気のない学生は、隅の方にまとまって座り、携帯をいじっていたり、寝ている様子を目にする。よって、授業のやり方に工夫が必要である。

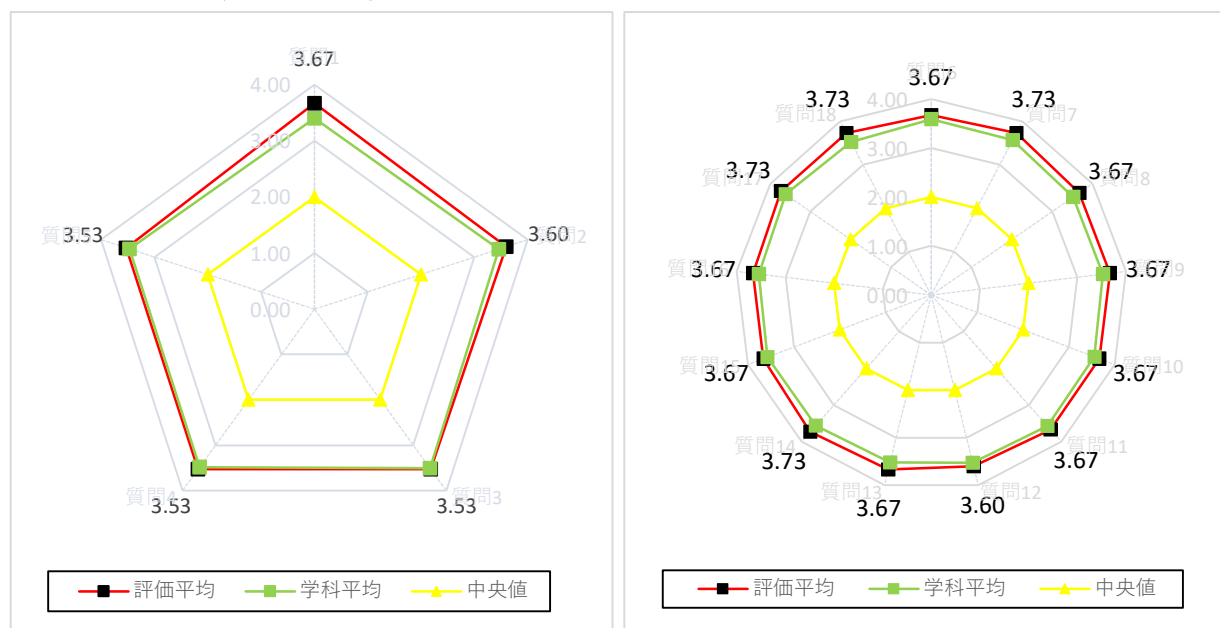
次に、質問6～12について分析すると、こちらも学科平均と同程度であった。これまでずっと、この科目の評価は学科平均より高かったのも、例年と異なる結果であった。実際、試験を行ってみると、例年と同じ教え方であったにも関わらず、再試験となった学生が多数いた。つまり、このことを合わせて考えてみると、学生の基礎学力がこれまでより低くなっており、これまでの教え方では不十分であるといえる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生が、本講義を聞きたいと思えるように、身近なニュースを取り入れていく。また、テストのための勉強でなく、将来管理栄養士として働くために必要な知識であることを授業のたびに伝えていきたい。また、学力が向上することで、勉学の興味関心は上昇すると思うが、自己学習する習慣がなく、どのように自己学習してよいのかわかっていないようである。現在、復習プリントを配布しているが、語句を埋める形式であるため、全部覚えるにはかなりの学習時間が必要である。学生は国家試験に興味があると思うので、授業で教えた分野の国家試験問題を配布し、学力の向上及び興味関心の向上を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		食事設計実習	71名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本年度の授業評価は、全項目において学科平均および共通教育科目の平均値を大きく上回る極めて良好な結果となった。まず、学生の受講態度（Q1?Q5）において、欠席の少なさを示すQ1が「3.67」と非常に高く、Q3の受講態度も良好である。これは、学生が目的意識を持って主体的に出席し、真摯に授業に臨んでいたことを示唆している。教員側の評価（Q6?Q17）に関しては、特にQ14「質問への誠実な対応」、Q15「公平な対応」、Q17「授業への熱意」の項目で4.0に近い高得点を維持しており、教員と学生の間の信頼関係が強固に構築されていると評価できる。また、Q9「分かりやすさの工夫」やQ10「視覚資料の活用」についても高い評価を得ており、専門的な内容を噛み砕いて伝える教育手法が奏功したといえる。一方で、学生自身の工夫（Q4）は、他の項目と比較すると「3.3」前後とわずかに低い傾向にある。教員側の熱意や資料の質に助けられている面が強く、学生が自らノートをまとめたり予習復習を行ったりする「能動的な学習（アクティブラーニング）」の動機付けについては、さらなる向上の余地が残されている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、本年度得られた高い満足度を維持しつつ、学生の「自律的な学習習慣の定着」に重点を置いた改善を行う。具体的な取り組みとして、以下の3点を実施する。

自学自習を促す仕組みの導入：

評価が相対的に低めであったQ4（学生自身の工夫）を改善するため、授業冒頭に前回の復習クイズを実施したり、生成AIを活用した予習・復習のガイドラインを提示したりすることで、学生が自ら調べ、考える機会を意図的に創出する。

双方向性のさらなる強化：

Q16（双方向のやり取り）の評価をさらに高めるため、学生からの質問やコメントを匿名で共有できるツールを活用し、個々の疑問を即座に授業へ反映させる体制を強化する。

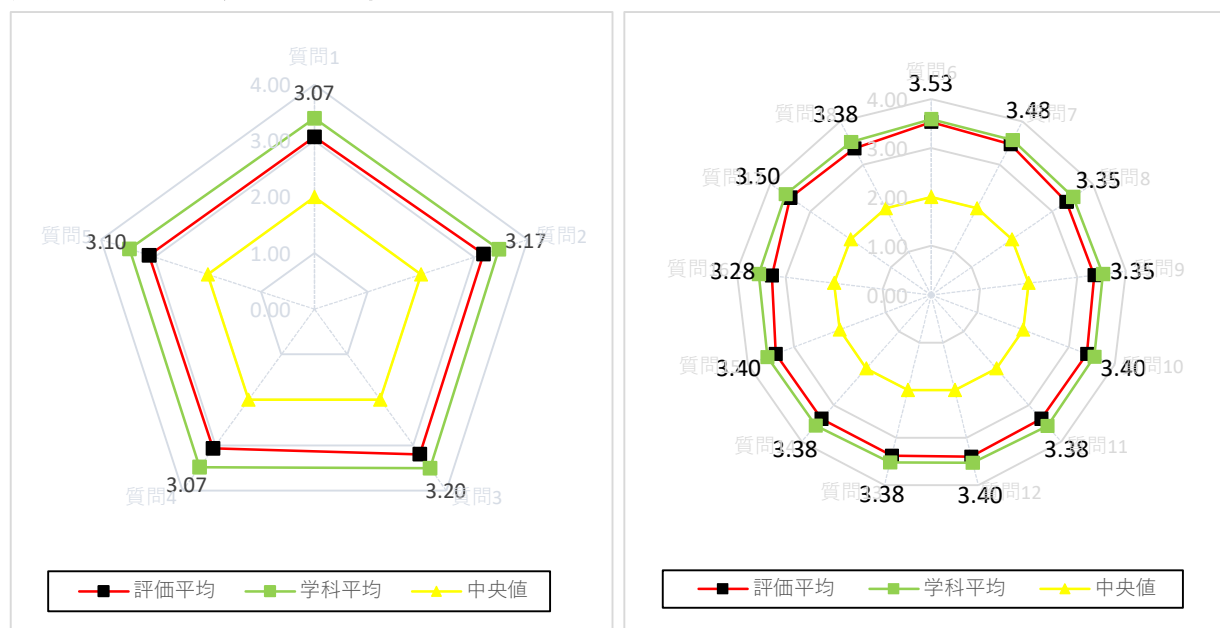
教育資料のアップデートとICT活用：

高い評価を得た視覚資料（Q10）については、最新の栄養学の知見や図表を反映させ、より直感的に理解できるグラフィックへの更新を継続する。また、反転授業の要素を取り入れ、基礎知識は動画等で事前学習させ、教室では応用的な演習や議論に時間を割くことで、授業の質を一層向上させる。

これらを通じて、学生が「教えられる」だけでなく「自ら学び取る」姿勢を育む授業形態を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		ライフステージ別栄養学	72名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

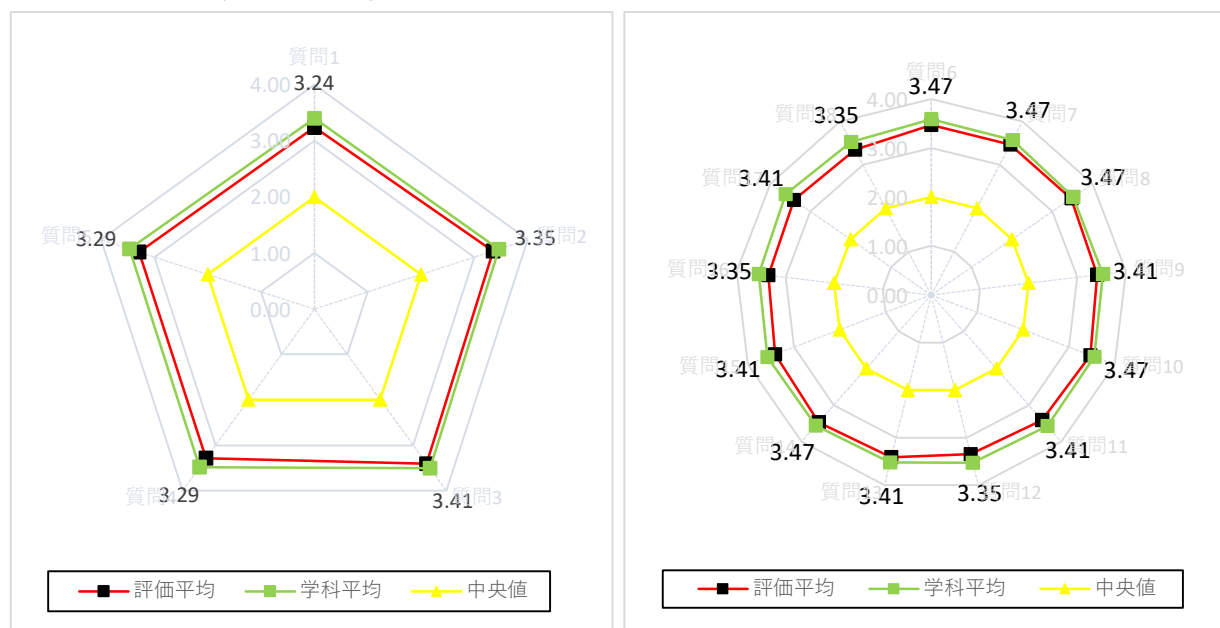
すべての評価項目において概ね学科平均と同じレベルにあったことから、おおむね満足できる内容であったと考えているが、個別コメントを見ると授業のペースが速かったと回答した者がいたことから、学生の理解度に差があると考えられる。ゆえに、個々の理解度や反応に配慮し、より双方向的な授業となるよう改善の余地はあると思われる。また、スライドの文字が見えにくかったと回答した者がいたため、配付資料の活用方法などについても、よりわかりやすく説明することが望ましいと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

メモ取りの状況を含め授業スピードにおいては学生のリアクションを意識しつつ、重要ポイントがより明確となるよう授業展開を工夫していきたい。また、学生自身が自主的に学べるよう“アクティブ・リコール”の導入や、ICTを活用した繰り返し練習に取り組める環境作り及びアルタイムでのフィードバック等、個々の理解度に配慮した授業展開になるよう意識していきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		食事摂取基準概論	72名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

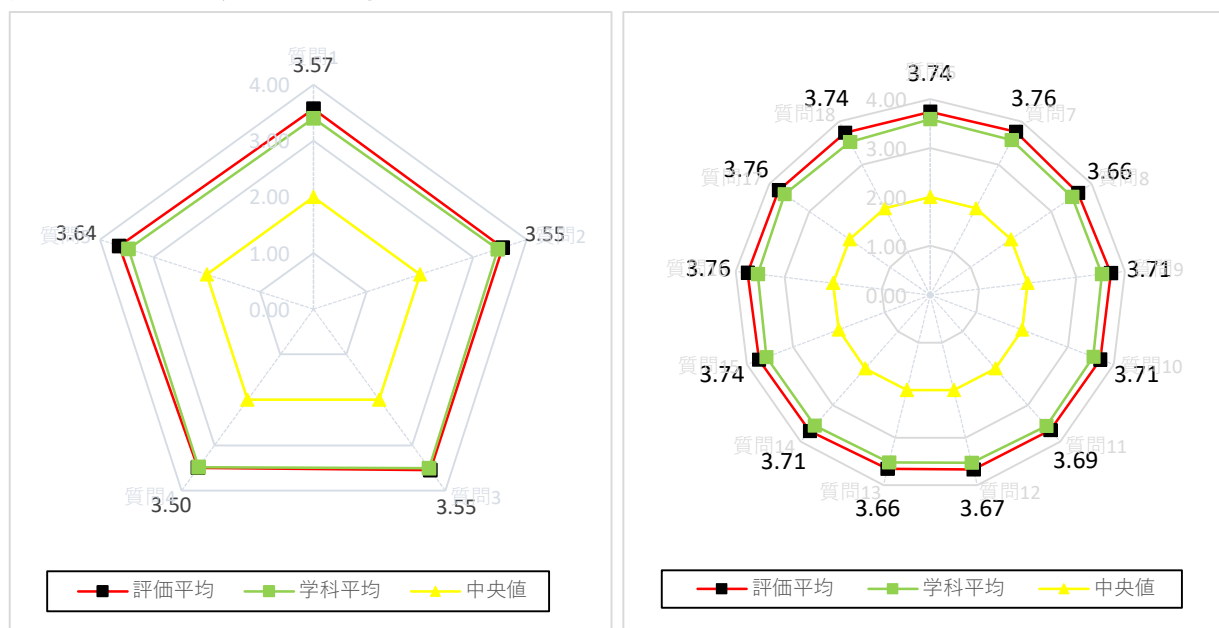
すべての評価項目において概ね学科平均と同じレベルにあったことから、おおむね満足できる内容であったと考えている。一方で、定期試験の結果を振り返ると学生の理解度に差があることから、日々の授業より個々の理解度や反応に配慮し、双方向的な授業となるよう意識することが望ましいと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

メモ取りの状況を含め授業スピードにおいては学生のリアクションを意識しつつ、重要ポイントが明確となるよう授業展開を工夫していきたい。また、学生自身が自主的に学べるよう“アクティブ・リコール”の導入や、ICTを活用した繰返し練習に取り組める環境作り及びアルタイムでのフィードバック等、個々の理解度に配慮した授業展開になるよう意識していきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		応用栄養学実習	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

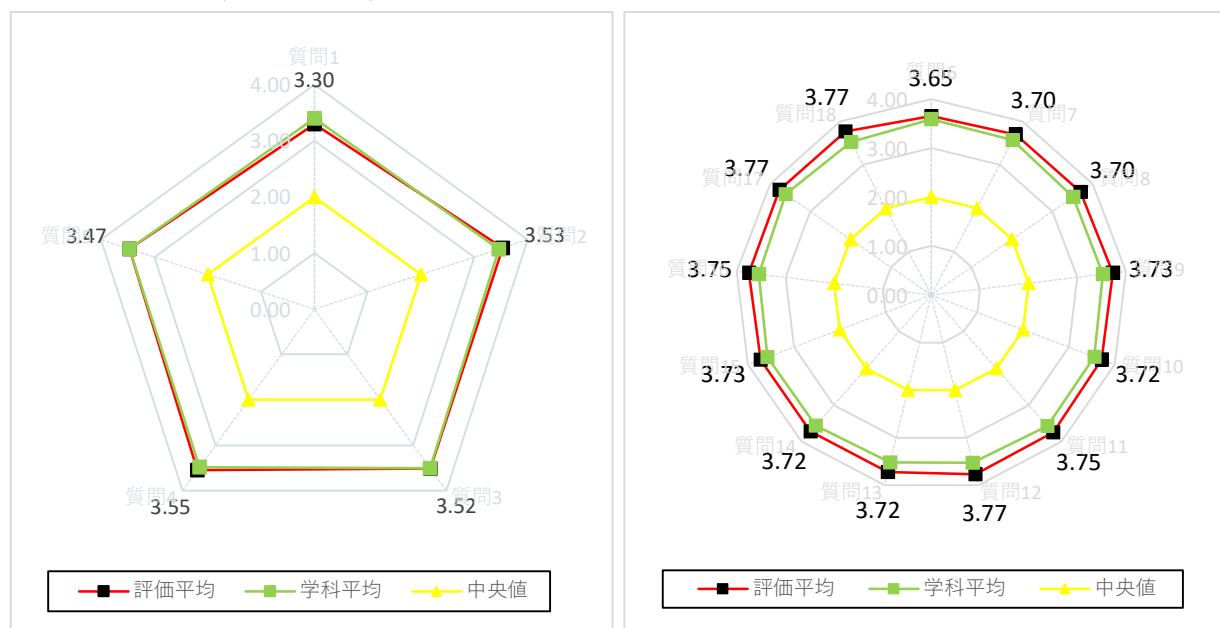
すべての項目において学科平均より少々上回る評価を得られた。また、「実習を通してライフステージ別の栄養ケアが学べた」という学生コメントもあることから、おおむね自主的な学びができた内容であったと考えている。とはいえ、本科目は学生自身が考え、課題を発見し・解決策を見つける展開を重視しているため、学生によっては“正解”というものがないスタイルが合わず、苦手とする学生もいるものではないかと思われる。学生誰もが積極的に学び、課題解決に取り組む姿勢が向上できるよう、机間巡視・指導を徹底し学生個々のレベルに応じた授業取り組みのための改善は必要であると考えます。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目はグループワークを中心とする実習を主とする科目であるので、グループ編成を含め、より意欲的に参加できる授業内容になるよう授業展開を工夫していきたい。また、机間巡視・指導を徹底し、個々の理解度や反応に配慮し、一人一人への積極的な声かけ・アドバイスを心がけることで、問題解決能力がより高まることを期待したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		給食経営管理論	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本年度の授業評価結果は、全ての質問項目において全体平均を大きく上回る極めて良好な数値を示した。まず、学生自身の受講態度（Q1?Q5）について分析する。欠席の少なさを示すQ1は「3.67」と、全体平均の「3.4」を上回っている。これは学生が目的意識を持って主体的に出席し、真摯に授業に臨んでいたことを示唆する。

授業内容・方法に関しては、特にQ16「双方向的なやり取り」の評価が特筆に値する。全体平均の「3.55」に対し、本授業では「3.75」を記録した。レポートへの適切なフィードバックや学生からの質問を授業に取り入れる工夫が、学生の満足度向上に大きく寄与したと評価できる。また、教員の誠実な対応（Q14）や授業への熱心な取り組み（Q17）も4.0に近い高水準にあり、教員と学生の間で強固な信頼関係が構築されている。結果として、総合評価（Q18）においても非常に高い満足度を得るに至った。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、現在の強みである「学生との対話」を軸に、教育効果のさらなる向上と学生の自律的学習の促進を目指す。具体的な取り組みとして、以下の3点を重点的に実施する。

双方向コミュニケーションの更なる深化：

極めて高い評価を得たQ16（双方向性）を継続・発展させるため、デジタルツール等を活用したリアルタイムな質疑応答をさらに強化し、学生一人ひとりの疑問や関心に即応できる授業展開を追求する。

自学自習を促す具体的支援：

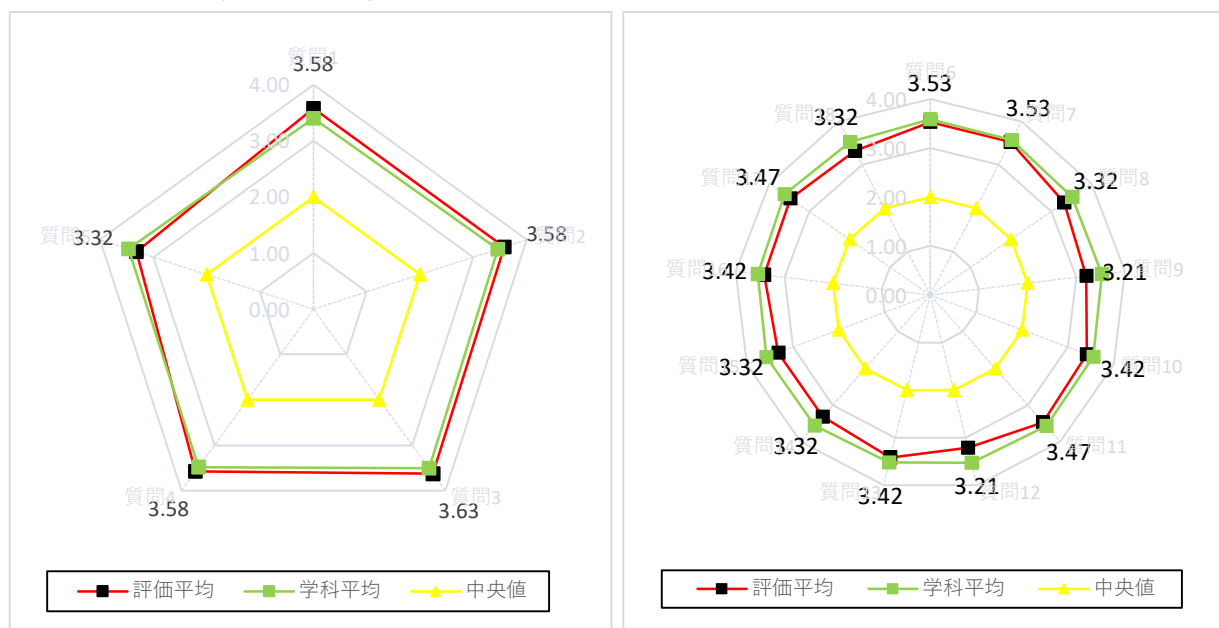
学生の満足度は全体的に高いものの、自らノートをまとめる等の学習の工夫（Q4）には依然として向上の余地がある。配布資料（Q11）の有効活用法や予習・復習の具体的なガイドラインを提示し、受動的な受講から能動的な学習姿勢への転換を強力にサポートする。

教材のアップデートと知的好奇心の喚起：

良好な評価を得ているQ8、Q9について、最新の栄養学の知見をさらに反映させる。専門知識と実社会との繋がりをより明確に提示することで、学生の興味・関心を継続的に刺激する教材作成に努める。これらを通じて、学生が高い満足度を維持しつつ、確かな専門性を身につけられる教育環境を構築していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		栄養総合演習Ⅱ	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

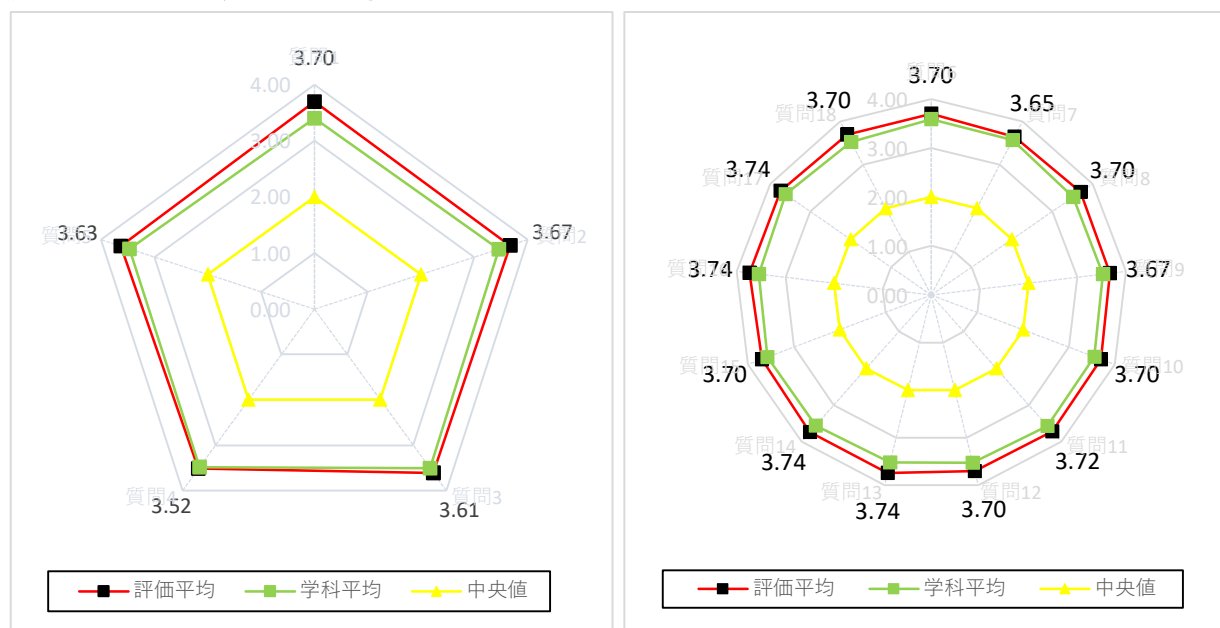
各評価項目において概ね学科平均と同じレベルにあったが、学生コメントや授業時の様子を振り返ると「授業内容の理解が追いつかない」「実際の現場を想定した課題取組に苦慮する」学生もいたように感じている。学生誰もが実習に向け、自主的な学びの向上ができるよう、学生の習熟度や性格に応じた指導が必要と考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業補助となる動画作成やわかりやすい配付資料の作成を心がける他、机間巡視・指導を徹底し個々の理解度や反応・性格に配慮し、一人一人への積極的な声かけ・アドバイスを心がけることで、実習に向けた課題発見や自主性などがより高まることを期待したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		給食経営管理実習	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業の評価結果は、全ての質問項目において平均値を上回っており、優れた教育成果を収めている。まず、受講態度（Q1?Q5）について分析する。欠席の少なさを示すQ1や、授業への真剣な取り組みを問うQ3において高い数値が維持されている。これは、学生が明確な目的意識を持って主体的に出席し、規律ある態度で受講していたことを裏付けるものである。

授業内容・方法（Q6?Q17）に関しては、特にQ6「シラバスの説明」が「3.7」と全体平均の「3.59」を大きく上回っている点特徴的である。学期冒頭に到達目標や計画を明快に提示したことが、学生の学習の通しを立てやすくしたと推察される。また、学生の質問に対する誠実な対応（Q14）や授業への熱意（Q17）も4.0に近い高得点であり、教員と学生の間に強固な信頼関係が築かれている。これらの要因が重なり、総合評価（Q18）における非常に高い満足度へと繋がったと評価できる。一方で、学生自身の工夫（Q4）は高水準ながら他の項目より伸長余地があり、能動的学習の更なる動機付けが今後の課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、現状の高い満足度を維持しつつ、学生の「自律的な学習能力の向上」と「対話型授業の深化」を重点目標とする。具体的な取り組みとして、以下の3点を実施する。

能動的学習（アクティブラーニング）の促進：

評価に伸長余地が見られた「学習の工夫（Q4）」を改善するため、授業内でのアウトプット機会を増やす。具体的には、授業冒頭に前回の要点をまとめる時間を設けるほか、生成AIを活用した要約や疑問点の抽出を奨励することで、学生が自ら調べ思考する予習・復習の習慣化を支援する。

学習目標の具体化と動機付けの強化：

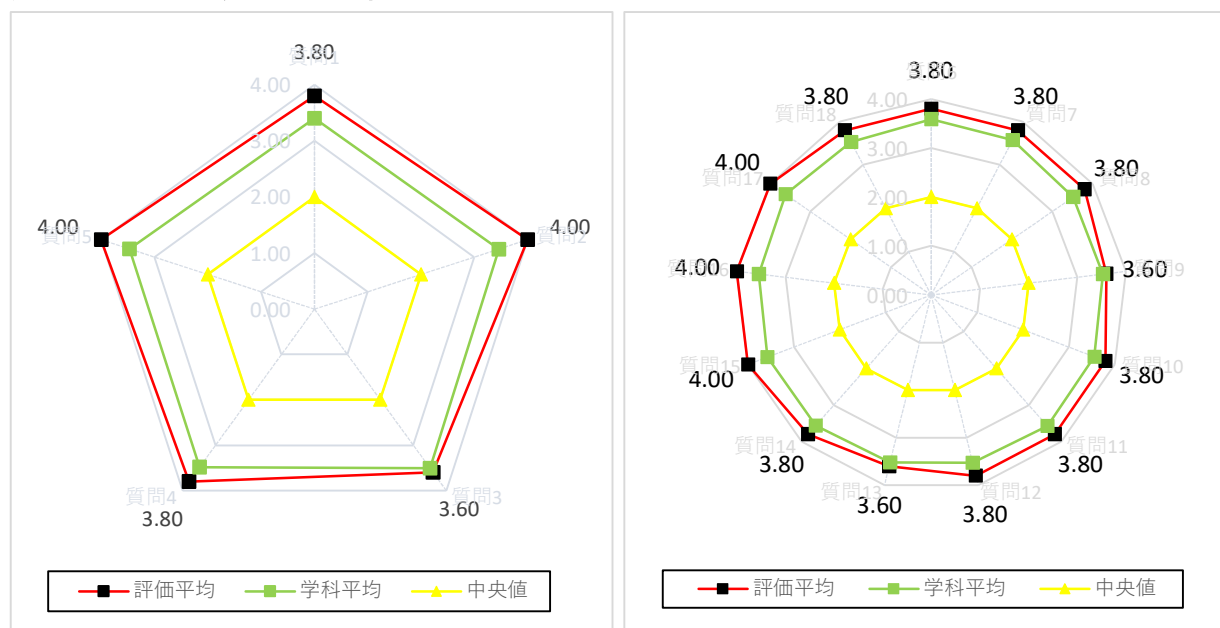
高い評価を得たシラバス説明（Q6）を継続しつつ、各回の講義内容が管理栄養士国家試験や将来の実務にどう直結するかをより具体的に提示する。これにより、専門知識の習得に対する学生の内発的な動機付けを一層強化する。

双方向コミュニケーションの更なる充実：

Q16で高く評価された双方向的なやり取りを発展させる。デジタルツールを用いた質疑応答や、レポートへの丁寧なフィードバックを徹底することで、多人数授業であっても個々の学生の理解度に寄り添った柔軟な授業運営を追求する。これらを通じて、学生が受動的な

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		健栄ゼミ（基礎１）	33名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

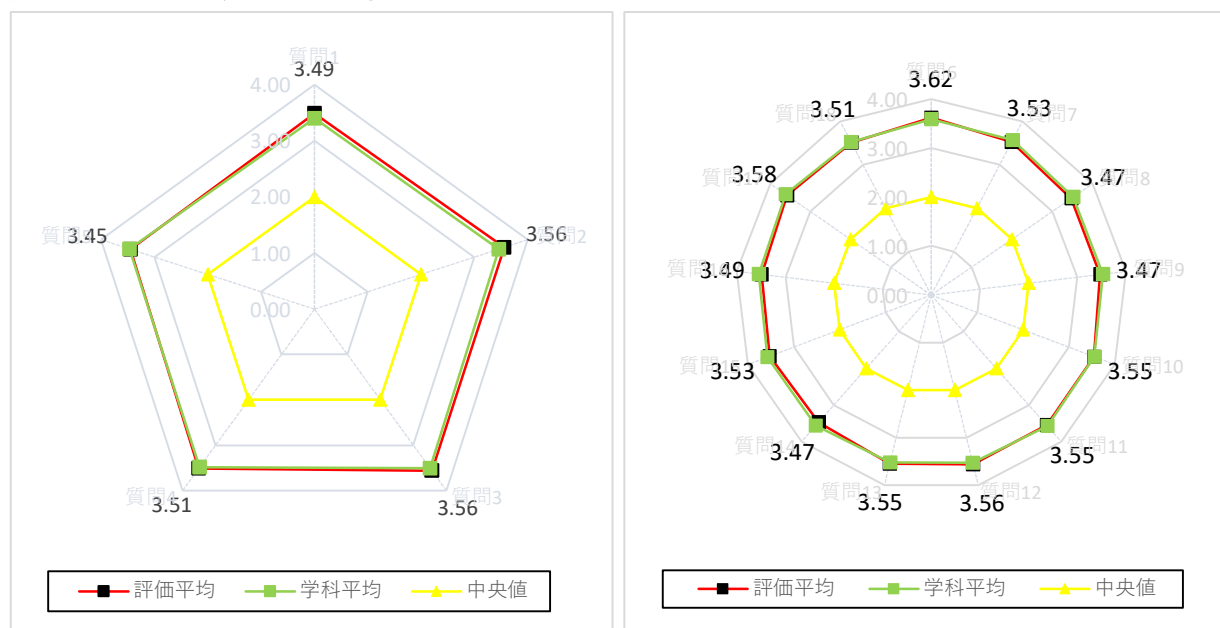
評価対象年度外であることから分析するには回答数が少ない面があるものの、すべての項目において学科平均より少々上回る評価を得られたことから、おおむね自主的な学びができた内容であったと考えている。とはいえ、本科目は学生自身が考え、課題を発見し・解決策を見つける展開を重視しているため、学生によっては“正解”というものがないスタイルが合わず、苦手とする学生もいるものではないかと思われる。学生誰もが積極的に学び、課題解決に取り組む姿勢が向上できるよう、机間巡視・指導を徹底し学生個々のレベルに応じた授業取り組みのための改善は必要であると考えます。

（３）次年度に向けての取り組み

本科目は、課題解決型学習を主とする授業であるので、学生がより意欲的に取組めるよう机間巡視・指導を徹底し、個々の理解度や反応に配慮し、一人一人への積極的な声かけ・アドバイスを心がけることで、問題解決能力がより高まることを期待したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		健康栄養学演習	71名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

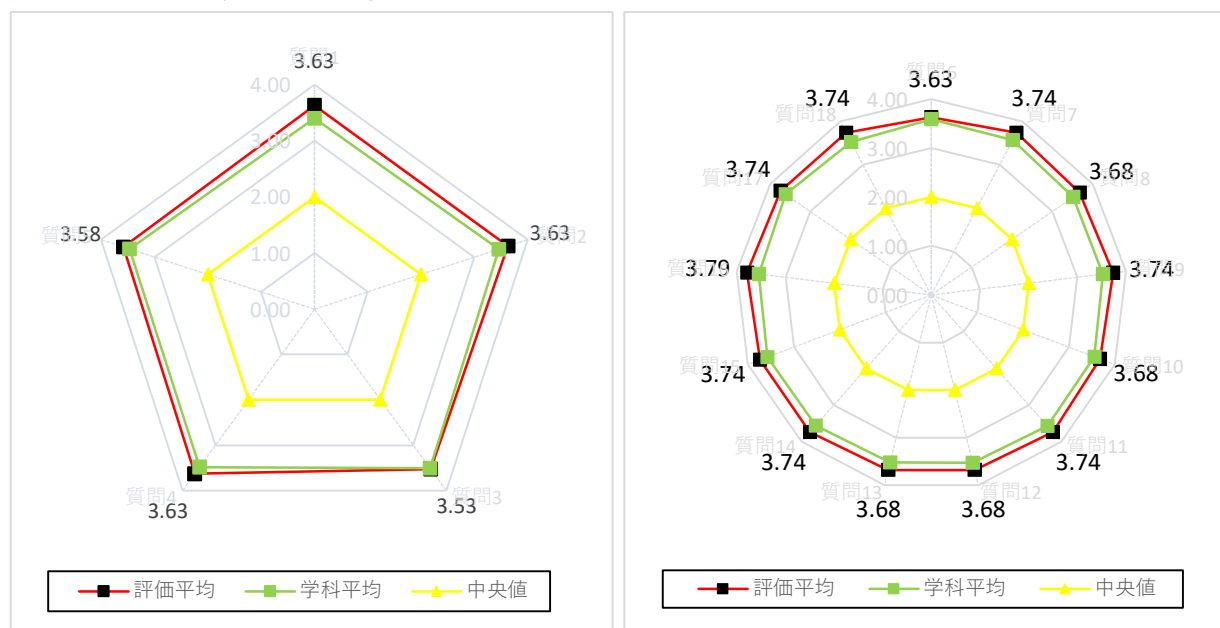
本授業は学科平均と同程度の評価であり、全体として一定の水準を維持している。特に「シラバスの説明」に関する評価が高く、授業の目的や進め方については適切に伝達できていたと考えられる。本科目は複数の専門教員によるオムニバス形式で実施しており、各分野の視点から国家試験に必要な基礎知識を幅広く学べる点は教育的意義が大きい。一方で、「学生の質問への対応」が低評価であり、教員ごとの対応のばらつきが影響した可能性がある。また、模試受験に関する説明不足も見られ、情報共有の不十分さが課題として挙げられる。今後は教員間での連携を強化し、対応方針や情報の統一を図ることで、学生の理解と信頼の向上が求められる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、オムニバス形式の利点を活かしつつ、教員間の連携強化と授業運営の統一性向上に重点を置く。具体的には、事前に担当教員間で授業方針や学生対応の基準を共有し、質問対応についても一定の水準を保てるよう調整を行う。また、模試受験等に関する重要事項については、教員間で情報を一元化し、学生に対して誤解のないよう統一した説明を徹底する。さらに、授業内外で質問しやすい環境を整えるため、オンラインツールの活用などにより、双方向的なコミュニケーションの機会を増やす。これにより、学生の不安軽減と理解促進を図り、より質の高い国家試験対策科目としての充実を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		食品衛生学実験	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まず、質問1～5について分析すると、学科平均よりやや高い評価であった。学生は、やる気をもって取り組んでいることがわかった。この科目は、選択科目で、履修したいと思って履修していることが関係していると思う。

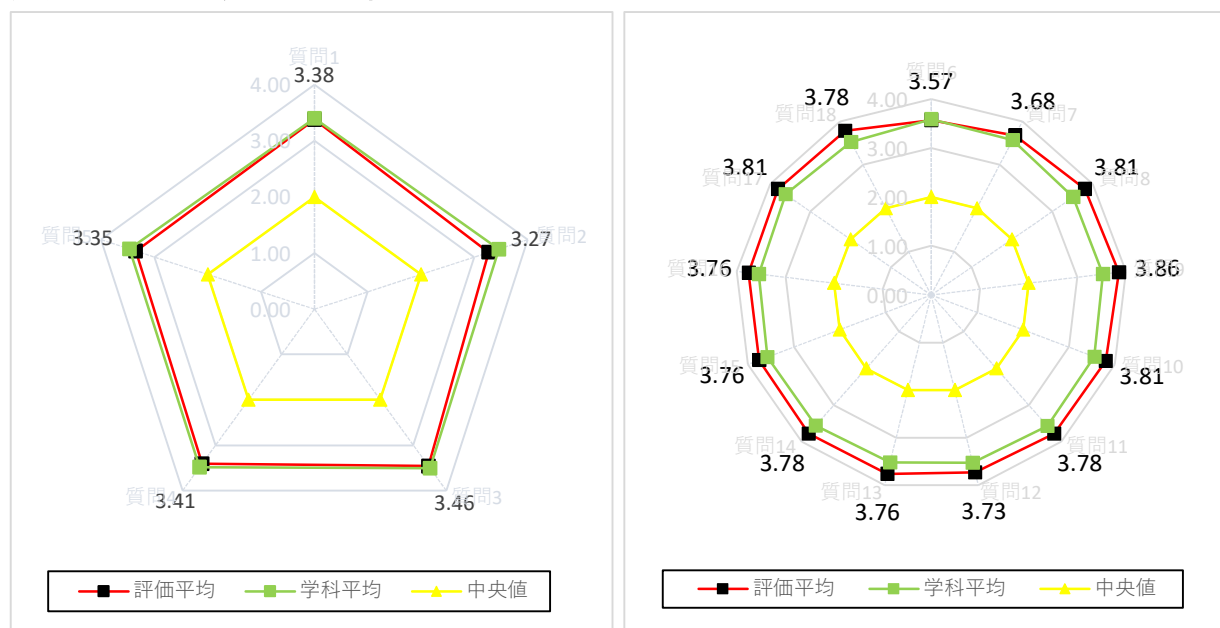
次に、質問6～18について分析すると、どの項目も学科平均より高い評価であった。この科目は実験を行うが、実験の経験が浅い学生ばかりなので、デモンストレーションをしたりして、わかりやすく工夫している。その点が、評価されたと思う。また、レポートをかけない学生が多いので、初回に書き方を教え、最初のうちは授業中に書かせ、わからない学生にも丁寧に指導している。また、提出されたレポートに関しても丁寧に添削し、この授業を通してレポートの基礎が身につくように指導しているが、その点も今回の評価につながったと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

今回の評価をみるとどの項目も高評価であったので、次年度も、本年度のやり方を踏襲していく。実験については、問題なく進行しているが、レポートに関してはやる気のない学生が増えていると感じる。やる気がないと、レポートは出すだけとなって学生たちは成長できない。よって、自主性を尊重ばかりせず、レポートの書き方が身につくまではしっかりと指導していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		化学	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業は、学科平均と比較して概ね高い評価を得ており、特に「授業のわかりやすさ」や「視聴覚機器の活用」、「教員の授業への熱意」の項目で高評価が見られた。これらの結果から、授業内容の構成や説明方法に工夫がなされており、学生にとって理解しやすい環境が整えられていたと考えられる。また、視覚的な補助資料や機器の適切な活用により、学習内容の定着が促進されていたことも評価できる点である。

自由記述においても、「イラスト付き資料が分かりやすい」「楽しく学べた」といった意見が見られ、授業への興味・関心を高める工夫が一定の成果を上げていることが確認できる。特に、初学者にとって難解になりがちな化学分野において、「知識が増えたと感じた」というコメントは、学習到達感を得られていることを示しており、教育的意義は大きい。

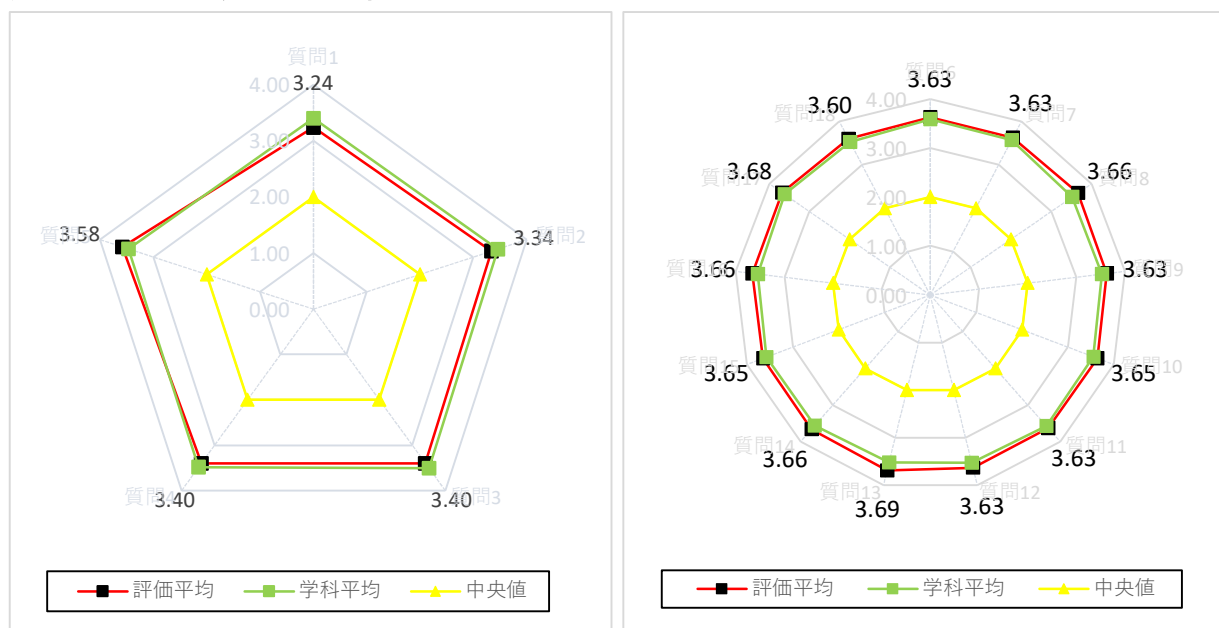
一方で、「シラバスの活用」や「学生自身の総合自己評価」が相対的に低い点は課題である。シラバスの活用が進んでいないことから、授業の到達目標や全体構造の共有が十分でなかった可能性が考えられる。また、自己評価の低さは、内容の難易度や理解の定着に対する不安を反映している可能性もあると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、本年度の高評価を維持しつつ、課題であるシラバス活用と学習到達感の向上に重点を置く。具体的には、各回の冒頭で授業内容とシラバス上の位置づけや到達目標を明示し、学習の見通しを持たせる工夫を行う。また、授業内に小テストを行っているが、さらに解説を十分に行って理解度を可視化するとともに、学生自身が学習成果を実感できる機会を増やす。さらに、難易度に配慮した補足説明や段階的な演習を充実させ、初学者の不安軽減を図る。これらの改善を通じて、理解の定着と自己評価の向上を促し、より質の高い授業運営を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 デジタル社会共創学環	健康栄養 デジタル社会共創学環		地域の食産業	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

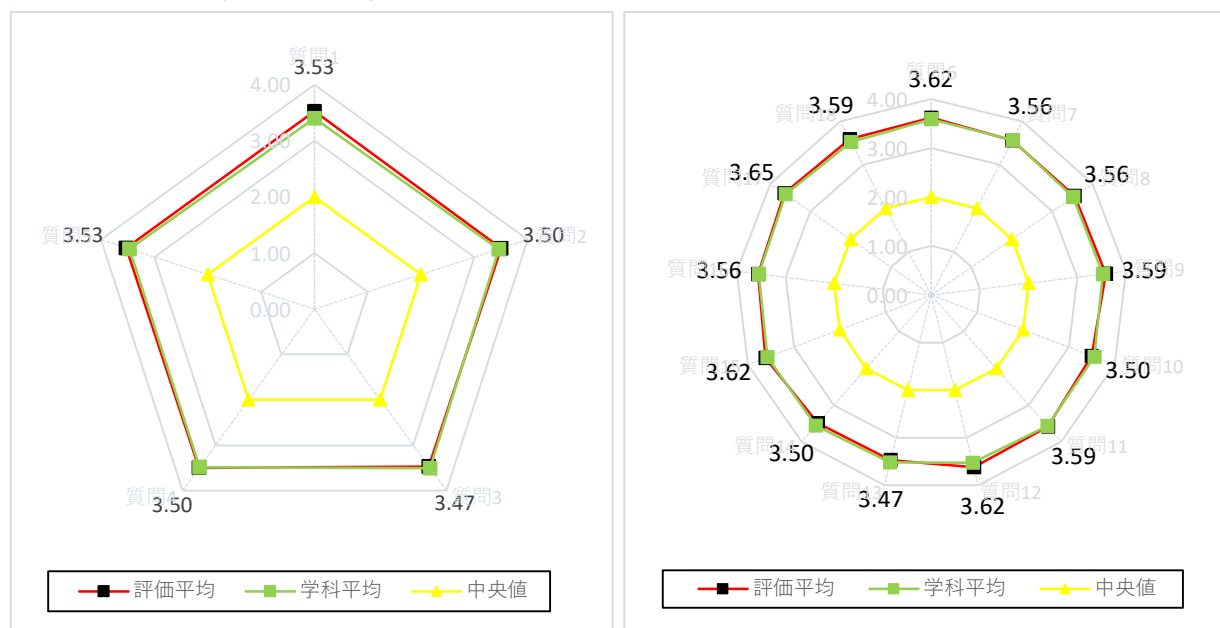
本授業は学科平均よりやや高い評価を得ており、「授業の進む速さ」や「興味・関心を引く工夫」において高評価が見られた。これは、ゲストスピーカーの活用やバーチャルでの商品開発、グループディスカッション・発表といった実践的な学習活動が、学生の主体的な学びと関心の向上に寄与した結果と考えられる。特に、商品開発やプレゼンテーション能力などの到達目標に対して、体験的に学ぶ機会を提供できた点は評価できる。一方で、「欠席回数」や「シラバスの活用」に関する評価が低く、授業の全体像や目的の共有が十分でなかった可能性がある。また、グループ分けに関する不満も見られ、学習効果に影響を及ぼしたことが示唆される。以上より、本授業は内容面での有効性が認められる一方、授業運営面に課題があり、今後はシラバスの明確化やグループ編成の工夫により改善が求められる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、本年度の実践的で興味関心を高める授業の強みを維持しつつ、授業運営面の改善に重点を置く。具体的には、各回の冒頭でシラバスとの関連や到達目標を明示し、授業全体の見通しを学生に共有することで、学習意識の向上を図る。また、グループ活動については、学生の特性やバランスを考慮した編成方法を検討するとともに、役割分担を明確化し、全員が主体的に参加できる仕組みを整える。さらに、出席の重要性を周知し、活動への継続的な参加を促すことで学習効果の向上を目指す。これらの改善により、到達目標の達成と授業満足度のさらなる向上を図る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 看護学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		特別の支援を要する児童・生徒の理解	58名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

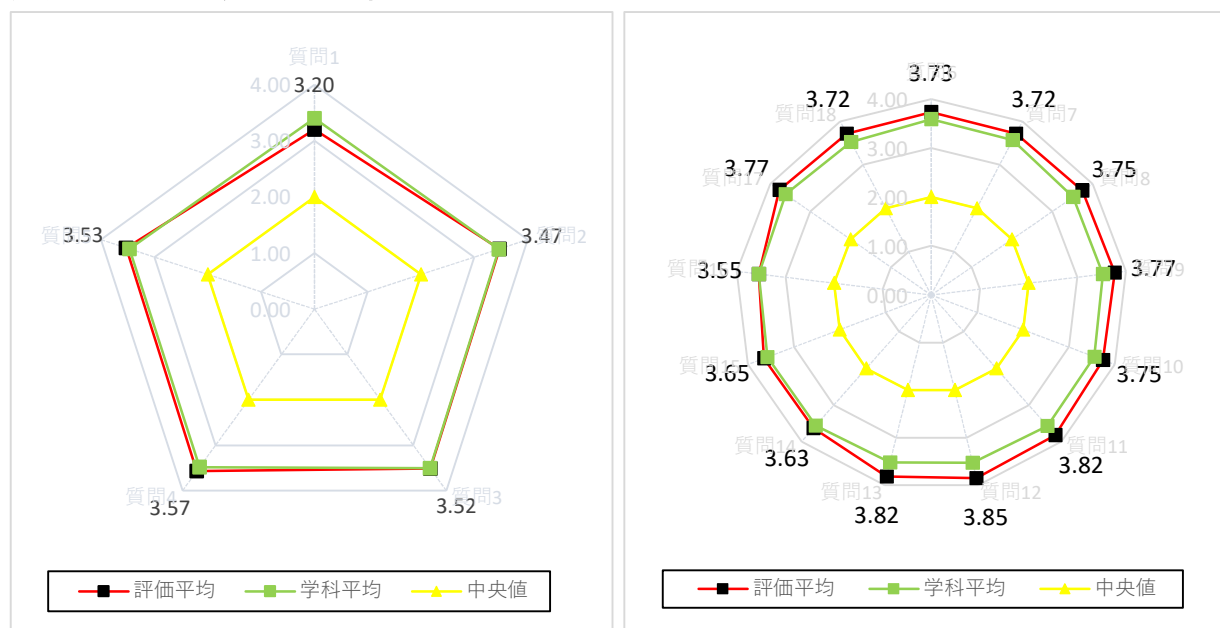
本科目は、教職課程の必修科目となっているため講義内容が1つの免許種に偏ることなく展開できるように講義と演習をバランスよく取り入れました。授業の総合評価は平均3.50/4.00点でした。自由記述の記載はありませんでしたが毎回講義の意見・質問等には、「教科書からの課題があるので、教科書を一番よく使った授業です」、「座学だけではなくグループワークなど演習があつてよかった」という記載があり、グループワークや演習を授業方法に活かすようにしたことが高評価につながったと考えます。しかし、質問2「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」、質問3「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組んだか」が平均3.0と他の項目より低い結果がみられました。グループワークを取り入れるなど能動的な講義展開となるように工夫しましたが、説明が多く飽きてしまったようです。受講生が興味関心を持てる内容を取り入れるよう授業展開を考えていきたいと思ひます。

(3) 次年度に向けての取り組み

アンケートに回答して下さった学生の皆さんに御礼を申し上げます。講義回数が8回と少ない中で学修内容が多義にわたるため、学生が学びやすいように講義の要点を提示しながら進めていきたいと思ひます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部	健康栄養		微生物学	75名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まず質問1～5について分析すると、やや学生は授業を休みがちなようである。出席点がないため、休んでも問題ないと思っているのかもしれない。その他の項目は、学科平均とは同程度であった。

次に、質問6～18について分析すると、おおむね学科平均より高かった。授業は講義なので、学生と触れ合う機会がない。そのため、14、15、16の項目の点数が学科平均と同程度であったと思われる。授業のやり方に関する質問は、学科平均より高く、学生に評価してもらえていると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業のやり方については、高評価であったので、次年度も今年度のやり方を踏襲していく。ただ、本講義を受け持ってまだ2年である。授業内容に関してはまだまだ工夫していけると感じているので、わかりやすくなるように工夫し、1年次に基礎学力を身に着けることができるように指導していきたい。また、試験を実施して感じたことは、かなり学力の低い学生がいる。自分で考えて自己学習することが難しいようなので、自己学習しやすい環境づくり（問題の配布等）も、検討していきたい。